ごあいさつ

# 創刊にあたって

総合科学教育研究センター長　佐々木　久　春

教育と同時に、研究が我々の仕事として当然であるとはいえ、開学初年度に紀要を発刊することができたのは、まことに喜ばしい。

総合科学教育センターは、教養基礎教育を担当する。文系基礎学の危機が言われている昨今、理科系大学で教養を担当する我々には、二つの大きな問題がある。

第一に、「教養教育」とはなにか、ということである。戦後50余年の歴史を持ちながら、教養部は無くなった。しかし、教養基礎の科目が大学から無くなった訳ではない。それでは過去の蓄積を踏まえて、より良く改組がなされて、教養教育の真意が実現されたかというとそうでもない。教養教育の各種の研究会に出てみると分かることだが、まず、教養教育で何を教えたらよいかという考え方が、各人各様である。そしてそれぞれの専門に入って行く学生が教養課程を終えたときに何を身につけていればよいのかということを、教師側で分かっていない。さらに、専門の教師側で教養担当者に何を要求するのか、はっきりしていない、もしくは考えていないようである。

第二に、文科系の学問環境が、危機に瀕しているということである。理科系の大学で教養を担当している我々は、研究者としては文系に属する。自分なりに文系の学問の目標を立ててやっていればよい、という訳には行かなくなったようである。なにしろ、哲学、史学、文学の学科名を残す国立大学は、三十数大学中わずかに三校だけになったと言う。そして、国際とか情報とか文化とか名前だけを変えて、同じ人間で同じ内実を教えているということも言われている。文系の学問はその純粋性を保ってこそ、自然科学や応用科学の基礎となりうると思うのだが、その存立自体が危うくなっているのである。

こうしてみると、我々にとって「研究紀要」を出すということは、どのような意味があるのか、自らはなはだ心もとなくなってくるのであるが、あまりこういうことを考えない方がよいとも言える。なぜなら文系の学問には本来目に見えて役立つ目的など無いかもしれない、しかし、それこそ文系学問の本道だからである。

ぜひ２号、３号と続刊して行きたいものである。